

## ●従来の学校緑化と学校ビオトープの違い

従来の学校緑化は、「自然＝緑」と捉え、美観と緑の量を優先するあまり、生きものに対する配慮を欠いてしまいがちでした。これに対し学校ビオトープは、生態系の視点をもって自然を取り戻すという違いがあります。

### 従来の学校緑化

- 植物の種類 → ●見た目がよく管理上都合のよい種類
- 野草 → ●雑草として排除する（環境美化）
- 落ち葉や枯れ枝 → ●ゴミとして焼却
- 生きもの → ●植物の種類が単純なので単一の種が大量発生しやすい
- 表土 → ●むきだしで固く、土中の養分や生きものも少ない
- 池 → ●コンクリート製でコイや金魚などの愛玩動物が飼育されており、野生の生きものは生息が困難

### 学校ビオトープ

- 立地に適合した、地域に昔からある種類
- 小動物のすみかとして大切にする
- そのままにするか堆肥の原料にする
- いろいろな種類の生きものが生息している
- 落ち葉等で覆われ柔らかく土中の養分や生きものも多い
- 水草が生え、水生昆虫など多くの野生の生きものが生息する

## ●虫の家をつくる

ビオトープに乳の空いた丸太や組んだ木の枝の束、木組みの落ち葉だめなどを置くと、昆虫など小動物のすみかとなります。



ドロバチなどの生息空間として、丸太に孔をあけたものが有効である。



木の枝を積み上げるだけでも、カミキリムシなどが生息できるようになる。

## ●生きものが訪れるのをまつ

学校ビオトープが完成しても、生きものを人間の手で入れる必要はありません。トンボなどは、自分の力でビオトープを訪れ、そこをすみかとしていきます。魚類など陸上を移動できない生きものに関しては、近くの自然から少しだけ補給します。地域の生きものの生息を脅かすことのないよう、ニシキゴイやアメリカザリガニなど、もともとその地域にいなかったものを放すことは避けるようにします。

生態系のバランスがとれれば、蚊や毛虫など特定の生きものが大量に発生することはありません。魚やカエルがボウフラを食べたり、鳥が虫を餌としたりするためです。



落ち葉や枯れ枝をコンポストにすることで、学校ビオトープ内の土を豊かにすることができます。また、たい肥になるまではいろいろな虫の生息場としても期待できる。

## ●草刈りと利用

学校ビオトープは、花壇などと使い分けることで生物の生息空間としての位置づけを明確にし、剪定や草抜き・落ち葉かき、除草剤や殺虫剤の使用は避けて、自然がもつ回復力を活かしながら管理します。ただし草刈りに関してはまったく行わないわけではなく、年に1回刈るところ、5回刈るところなどを区分すると、環境に多様性が生まれ、多くの生きものがやってきます。また、学校ビオトープの目的・意義を児童生徒・保護者・地域に随時広報し、ビオトープづくりに参加を促すことは、学校ビオトープや自然への理解を深め、自然と共生する地域社会づくりに役立ちます。